サセックス・ダウンズメン協会（The Society of Sussex Downsmen）の活動：戦後ダウンランド委員会関係史料 1941-1946

坂梨　健史郎

1．はじめに

イングランド南部に位置するサウス・ダウンズ（the South Downs）は，東はイースト・サセックス州から西はハンプシャー州にまで続く長大な丘陵地帯であり，それはロンドンを含むイングランド南部の多くの人々に今日まで愛されてきた。それは牧草地として機能しただけでなく，人々に散策と眺望の場を与え，その景観はイングランド南部の，時にはイングランド全体の自然のシンボル的存在となってきた[1]。

そのサウス・ダウンズのサセックス州内での景観保全やそのほか通行権等の保護を主な活動目的とする団体がサセックス・ダウンズメン協会（The Society of Sussex Downsmen，以下「SSD」とする）である。この非営利組織は1924年，サセックス在住の文人アーサー・ベケットArthurBeckettを会長として，サセックス州およびロンドン在住の名士によって結成された。SSDは今日でも活発な活動を続けているが，本稿は第２次大戦中にSSD内に発足した戦後ダウンランド委員会（Post War Downland Committee）関係の史料について，1941年から1946年のそれを中心に略述するものである[2]。

［[SSD］全評議員及び東西サセックス州議会に送付された戦後ダウンランド委員会報告書の写し及び彼らの返答（1941年12月６日）］戦後保全に関する小委員会の現今の席上において，議事録の要約を評議会に送付することが提案された。前回の評議会において会長から提案された，地区責任者全員に送付するアンケートを準備する件については小委員会に於いて考慮されたが，本件を改めて検討したところ，交通の困難が増していることと，地区責任者の多くがなんらかの戦時労働を行っているため自由になる時間が極めて限られていることから，現時点では本件を実行に移すのは可能ではないと感じられた。

［SSD会長及びデリマン氏とイースト・サセックス州評議会都市計画責任者ハムフリー氏との面談，ルイス（1942年１月13日）］ハムフリー氏は極めて協力的で，近年評議会と地主との間で法的拘束力のある合意を結んだ結果，評議会の管轄下にあるダウンランドが事実上略奪を免れた件につき，その具体的経緯を概説して頂いた。かの如き保障を未だ持たぬ区画が残る箇所についても，評議会としては法的合意でカバーすべく全力を尽くすとのことであった。

ハムフリー氏は［また，］SSDは1932年計画法に基づき，田園地帯に影響を及ぼすあらゆる建設計画の提案について地元諸当局に対しその利害関係（interest）を登録しておくことができ，それによりSSDは早期に（in good time）計画の通知を受け，必要があれば実効性のある形で反対意見を申し立てることができると述べた。

［SSD会長及びデリマン氏とウェストサセックス州評議会都市計画責任者M・W・ロビンソン氏との面談，チチェスター，1942年２月17日］当該地域の保全に関する同州評議会の計画が大臣の承認を受ければ，それは将来の保全に向けSSDが満足のいく形での有効な基礎（a good basis）となるであろうことが明らかになった。

［SSD名誉書記から各市書記（town clerk）［市の行政トップ］へ送付された書簡の写し，1944年３月４日付］SSDの評議会の依頼により，貴殿に戦後計画の件につき書簡を差し上げる。（中略）多年にわたり，SSDはこれら［の目標］に向け邁進し，かつ多大な成果を達成した。地元当局が将来に向けての計画に積極的であることに鑑みて，SSD評議会は密集地外部の土地に関連するいかなる計画についてもSSDの見解が伝達されるべく，その事前情報を与えられることを要請する。

当評議会はその過去の活動における州，都市及び田園当局からの友好的協力に対して感謝の意を示すとともに，かかる良好な関係が戦後の時代にも受け継がれんことを心より希望するものである。当方が是が非でも回避したいのは「決定済みの計画（cut and dried schemes）」［を突き付けられて，それ］に抗議せねばならぬケースであり，その際に必ずや巻き起こるあろう軋轢である。この書簡を貴当局の相応しい委員会に提出されることを切に希望する。当評議会はいずれ貴委員会が当方の要望に応じるとの知らせを貴委員会より頂くことを信じてやまない。リリアン・ベイトリー

［ケンブリッジ保全協会（The Cambridge Preservation Society）年次

総会（1946年10月30日）での会長（［ケンブリッジ大学］モードリン学寮長）演説の写し，『ザ・ケンブリッジ・レヴュー』1946年11月号からの再録。（戦後ダウンランド委員会の将来の参考に。SSDにも応用可能。A・H・クルックより受領（1947年11月）］

1928年，一通の投書が『タイムズ』紙に掲載されたと記憶する。ヒューズ氏とダーンフォード氏両人の署名で，大学と境を接する田園地域，概ねマディングリー街道とグランチェスター方面の河川に挟まれた地域は何らかの手段で建設から救い出しオープンスペースとして保全されるべしとの提案であった。（中略）翌年，ケンブリッジ保全協会が法人格を得た。（ケンブリッジ）州統監（the Lord Lieutenant），ケンブリッジ市長，副長官並びに州評議会議長がみな喜んで職権上（ex officio）のポストを占めたという事実は将来に向け大変良き前兆となった。（中略）マディングリー街道が危険線（danger line 著者注：安全地域と危険地域を隔てる線）であると結論付けたのを記憶する。実際同街道は建設開発を呼び込んでいるし，マディングリー・ヒルズに至っているからだ。それは是が非でも保護すると我々は決意し，その線から始め，我々を側面から援護する［ケンブリッジ大学］学寮（トリニティおよびセント・ジョンズ）からの最も友好的な協力によりマディングリー・ヒルズに到達し，アムブローズ・ハーディング氏から快諾をいただいたためさらにそこから南下，コウトン（Coton）に至ったのを記憶する。それからトリニティの学寮長およびピルグリム・トラストからの素晴らしき寛大さによりコトンに拠点を構え，当地を前進のための主拠点とした。よって我々はグランチェスターを遠目に見つつ川へ進んでも差し支えないと感じた。折も折，目指す方角にかくも多くの土地を所有されるオックスフォード大学キングズ学寮からの素晴らしく温かい助力を得て，牧草地は確約された。だが我々に必要な土地の残りを所有するオックスフォード大学マートン学寮が反対するやもしれぬとの恐るべき懸念が一時あった。ここのこの点にこそ当協会の大きな将来が懸かっていると感じたと記憶する。マートン学寮に招かれたダーンフォード氏と私は当地に赴き，我々の計画を学寮長及び評議員達に説明した。我々は大いに歓待され，この訪問の結果，彼らは当該地の権利証書を我々に売却することに同意した。我々は農地としての価値と建設地としての価値の差額を支払い，当該地は恒久的に安全となった。

程なくキングズ学寮が同様の意思を示し，ここに我々は［ケム］川を底

辺とするマディングリー街道，コウトン及びグランチェスターを巡る半円形を獲得した。またもピルグリム・トラストとトリニティ学寮長が助力に駆け付けてくれた。彼らに再び言及するのは彼らの支援なかりせば，かの金額を支払うことは不可能であったからである。当時失敗していた可能性や，全将来がいかにこの初手の成功に懸かっていたかを回想するに，首尾よく運んだことを跪いて神に感謝したい気分だ。（中略）我々は作戦を拡大するにつれ，少々広範囲の物事に関わるようになり，通行権やフットパスの保護をも可能な限り引き受ける次第となった。我々はこの問題を探求し，地図付きの小冊子を刊行したところ，飛ぶような売れ行きであった。もし農家が乗り越え不能な踏み越え段（stile）を設置したり，フットパスを耕作しようものならば，― まあ，策には策をだ。我々はどの教区委員会でも容易に行動がとれるようにしている。

立ち返って現在では，あらゆることが未定である（in the balance）ように感じる。都市田園計画法の結果は承知していないが，我々としては全力で自らの理念を提唱しており，これらの計画の枠組にケンブリッジ保全協会の代表がいてくれるのは大変心強い。ここでも［書記］ファイジス=ウォーカー（Fyjis-Walker）氏に対し，氏がこの点で果たしたことすべてについて賛辞を贈りたい。

景観の問題に目を向ければ，景観は万人の所有物であると言わせていただきたい。樹齢200年（と聞いている）の大木群をまるまる一街路ぶんも伐採している男の話を聞いた時，私は思わず自問した，「いかなる道徳的権利によってそんなことができるのか。これらの樹木は幾世代にもわたり景観を美化しており，ある意味で広く住民の財産ではないか？」と。これらの問いは危険な問いであるとは思う。私は景観の国有化は望まない，それ以外の物の国有化を望まないのと同様だ。ただこの問題は必ずや持ち上がるだろう。我々としてはこの困難な問いに対して決定的な答えを与えることはできぬとしか言えないのだが，我々は地歩を固め，我々自身の原則を明白かつ不動たらしめんとせねばならぬ。常に良い先例は見倣い，悪い先例は避け，過去の教訓から学ばねばならぬ。子々孫々の権利という問題全体が今や我々に懸かっており，これは法案の提案により更なる注目を集めている。

私が子供時代のオックスフォードを記憶しているが，現在それは見る影もない。それもこの60年間のことである。ひと世代の間に何が起きうるか

は容易に見て取れる。ここにご参集の皆さん，この町や大学，国の力を有する皆さんに懇願する，共に行動し「ケンブリッジではかくなることを起こさせない」と声を上げよう。今後40年間でケンブリッジをかのごとく汚す者あらば，何人たりともその者の寝床に我が亡霊がとある月夜に現れるであろう，間違いなく，必ずやそこに参らん。美しい自然景観と近代的で醜悪な都市が同居することもあるし，美しい都市と単調で退屈な自然景観が同居することもある。しかし当地ではその美しさを二つとも手にすることができる，共にはるか太古に生まれ，共に歴史と伝統の衣をまとい，互いが互いを高めあうのだ。これらの美を保ち続け，滅びることのなきようにしようではないか。

1　Peter Brandon, The South Downs（Chichester，1998），xv.

2　本稿の史料は英国イースト・サセックス州文書館（East Sussex Record Office）所蔵「サセックス・ダウンズメン協会」史料中の「戦後ダウンランド委員会（Post War Downland Committee）」関係の書簡や文書である（整理番号ACC6849, Box 5）。なお，SSDは現在では「サウス・ダウンズ協会（South Downs Society）」という名称になっている。